

平成 30 年 2 月 1 日 (木曜日)

オールジャパン体制に関心

足立参院議員 ラオスのナムニアップダム視察

足立氏が着目したのは、合理的なダム施工を志向した RCC (ローラー・コンパクト・コンクリート) 工法の採用だ。質



宮ヶ瀬ダムの記念碑。足立氏は「事業に携わる人たちの足跡を残したかった」と語る

自民党の足立敏之参院議員が1月7、8日に、関西電力がラオスで進める「ナムニアップ1水力発電所建設プロジェクト」を視察した。建設省(現国土交通省)時代、宮ヶ瀬ダム(神奈川県)の建設事業に発注者の所長として従事した経験を

持った足立氏は、同ダムの建設で水没する地域に住む少数民族の生活再建などに「日本で培われたノウハウが生きている」と評価。東南アジアを中心にインフラ輸出を考える上でも参考になるとの見方を示した。

視察したプロジェクトは、27年間に及ぶ BOT (建設・運営・譲渡) 方式を採用したタイとラオス向けの水力発電事業。関西電力が出資する特別目的会社 (SPC) が事業主体となり、土木工事を大林組が施工するなど、オールジャパン体制で進められている。「黒四(黒部川第四発電所)にチャレンジ」をスローガンに掲げた高さ167 呎、堤体積約23 万立方呎、堤頂長530 呎に及ぶ大規模な重量式コンクリートダムだ。

足立氏が着目したのは、合理的なダム施工を志向した RCC (ローラー・コンパクト・コンクリート) 工法の採用だ。質

の高地ダムづくりを目指し、自身が経験した宮ヶ瀬ダムで採用した RCCD (ローラー・コンパクト・ダムコンクリート) 工法と比較しながら、「経済的にスピーディーに造れるよう工夫していた」と感じたという。

骨材の最大粒径や締め固め方法、コンクリートの配合など、日本の施工環境で採用する手法とは異なるやり方などにも関心を持って視察した。

ハード面の技術に加え、少数民族のモン族の生活再建が手厚く行われていたのを見て、「その取り組みが奏功して地域にも受け入れられる事業になっていた」と日本のソフト技術の高さも評価した。施工を通じて現地技術者の養成にもしっかり取り組んでいることも「素晴らしいと思った」と話す。

国交省で技監を務めていたことからインフラ輸出にも力を入れてきた足立氏



視察したナムニアップダムで

は、「今回のようなオールジャパン体制で確立したダム技術は、東南アジア諸国の特に電力開発で役立つだろう」とみる。加えて、地球温暖化問題も視野に入れ、洪水対策として既存ダムの能力をアップさせるダム再生技術を含めたインフラ輸出にも力を入れていきたいとの考えも示した。

建設省、国交省でダム行政に携わった足立氏は、自身が所長を務め、2000 年の土木学会賞技術賞を受賞した宮ヶ瀬ダムの建設事業で、発注者、元請、下請を問わず事業に携わった人たちの名前を刻んだ記念碑

「携わった人の名前を残すのは大切なこと」

一部地域で工事銘板を設置する動きが活発化する中、「共にものづくりに関わった人たちの名前を残すことは、その人の人生にとっても大切なこと」と指摘。銘板設置費用を積算で計上することを含めた発注者の対応にも期待を示した。